

小学生への福祉教育と他学科との連携から介護福祉学科の学生が得られた内容検討 — 松本短期大学と筑北村との交流事業を通して —

A study on the contents of students is obtained of the department for training of certified care workers on the basis of the welfare education for elementary school students and cooperation with other departments
— Exchange programs between Matsumoto Junior College and Chikuhoku village —

福田 明 合津 千香 釜土 禮子
Akira FUKUDA Chika GOZU Reiko KAMADO

要旨

2012（平成24）年度、松本短期大学と長野県筑北村は教育支援や地域振興を目的に連携協定を結び、その後、いくつかの交流事業を行ってきた。本稿では、それらのうち第3回目と第5回目の交流事業をとりあげ、その中で介護福祉学科の学生が小学生への福祉教育や他学科（幼児保育学科・看護学科）との連携から得られた内容は何かを把握することにした。

方法としては、第3回目と第5回目が終了後、介護福祉学科から参加した学生を対象に半構造化面接調査を行い、その回答内容を一文一義で分類後、内容別にグループ化した。その結果、小学生との関わりからは「教える中での学びと復習の機会」「小学生から受けた喜び・やりがい」「わかりやすく説明する難しさ」、他学科との関わりからは「見習いたい他学科学生の言動・姿勢」「新たな視点・視野の獲得」「他学科の学生との話しづらさ」が見出された。

本調査結果からは、①小学生や他学科との関わりは、学生自身の学びの発揮・確認と広がりにつながる可能性、②学生の喜び・やりがいを引き出すためにも、介護の知識・技術を活かして小学生から認められる体験の重要性、③他学科、特に看護学科との交流機会を増やし、卒前教育の段階から対人コミュニケーション能力の向上を図っていく必要性が示唆された。

【キーワード】 交流事業 介護福祉学科 小学生 福祉教育 他学科（幼児保育学科・看護学科）

1. 背景

大学を地域における重要な資源と位置づけ、地域の活性化に向けて積極的に活用していく連携の取り組みは、近年さまざまな大学と地域で行われるようになった¹⁾。大学と地域との連携の重要性が増す中、2012（平成24）年度、松本短期大学は長野県筑北村と教育支援や地域振興を目的に連携協定を締結した。

そこで、まず松本短期大学と筑北村について説明しておきたい。図1からもわかるとおり、筆者らが所属する松本短期大学は長野県のほぼ中心部に位置する松本市にある。1993（平成5）年に全国の大学・短期大学で初めて「介護福祉学科」を設立した伝統ある介護福祉学科をはじめ、幼児保育学科、看護学科、専攻科福祉専攻の3学科・1専攻を有し、ケアスペシャリストの育成を目指している。

一方、筑北村は松本市に隣接しており、松本短期大学とは地理的にも近い関係といえる。2014（平成26）年4月時点で人口4727人、高齢化率40.7%となっており、まさに少子超高齢社会が進む地域の1つである。



図1 松本短期大学と筑北村の位置関係

次に、連携協定に基づいて実施されている松本短期大学と筑北村との交流事業について説明しておく。2015（平成27）年6月までの時点で、松本短期大学介護福祉学科の学生が筑北村にある通所介護事業所（デイサービスセンター）を訪問して利用者の話し相手になったり、歌等を披露したりした。その一方で、筑北村の小学生は松本短期大学に見学も兼ねて遊びに来たりする等、計6回の交流事業を実施してきた。

計6回の交流事業のうち、介護福祉学科の学生だけでなく、幼児保育学科や看護学科の学生も関わった交流事業は、2014（平成26）年3月30日の第3回目と2015（平成27）年3月20日の第5回目であった。この第3回目・第5回目ともに、筑北村にある3小学校の1年生から6年生まで約40人が松本短期大学を訪れ、介護福祉学科、幼児保育学科、看護学科の3学科の学生約50人と交流した。

その際、介護福祉学科では、第3回目と第5回目ともに小学生への福祉教育を行った。第3回目では、小学生が段差や坂道等での車椅子操作を学生が指導する中に行ったり、車椅子に乗る利用者体験を行ったりした。図2は、この時の様子を伝える地元の新聞記事の一面である。第5回目では、利き手でない側の手で金平糖を箸で持ち上げる片麻痺体験をはじめ、アイマスクをした後、箱の中に手を入れて、その中身をあてる視覚障害体験を行った。



図2 車椅子体験の様子(信濃毎日新聞2014年4月4日)

2. 目的

筆者らには、これらの交流事業を行うにあたり、以下の2つの課題意識があった。

①介護福祉学科の学生は、日頃、実習等で高齢者との関わりはあるが、果たして小学生への福祉教育を通して何を得られたのであろうか。

②介護福祉学科の学生は、幼児保育学科と看護学科の学生と連携して交流事業を運営した中で得られたものはあったのか。あったとすれば、それは何か。

そこで本稿では、これら2つの課題意識に迫るため、第3回目と第5回の交流事業において小学生や他学科との関わりから介護福祉学科の学生が一体何を得られたのか、について把握することにした。その上で、小学生や他学科と介護福祉学科との関わりについて考察するとともに、今後の課題を検討することにした。

3. 対象と方法

1) 調査対象・方法と倫理的配慮

2014（平成26）年3月30日の第3回目と2015（平成27）年3月20日の第5回目の交流事業が終了した後、それぞれ2014（平成26）年4月9日と2015（平成27）年4月10日に介護福祉学科から参加した学生を対象にして個別の半構造化面接調査を行った。その際、事前に調査目的と研究・発表に用いること、調査協力の有無が成績に影響しないこと等を説明し、同意を得た学生から回答してもらった。

2) 質問内容と分析対象・方法

調査では、第3回目・第5回目ともに調査時点で2年生である学生9人が協力してくれた。具体的には、第3回目から参加者8人中3人（37.5%）、第5回目から参加者13人中6人（46.2%）であった。調査協力者の割合が5割未満と低くなってしまった理由としては、新年度が始まったばかりであり、新1年生を迎える側の2年生が慌ただしかったこと等があげられる。

この調査協力者9人に対して「小学生との関わりから思ったこと・考えたこと」と「他学科との関わりから思ったこと・考えたこと」をそれぞれ質問して回答を得たところ、回答率100%となった。そこで、この9人から得られた回答内容を分析対象とし、その逐語録を作成した。そしてその内容について一文一義、つまり1つの文に1つの意味内容となるように付箋を用いて分類する作業を行った。なお、作業は筆者の1人が実施し、他の2人がその結果について確認した。

4. 結果

1) 小学生や他学科との関わりから得られた計36文における内容別7グループの全体像

回答内容を一文一義で分類した結果、小学生や他学科との関わりから思ったこと・感じたことに関して計36の文を抽出することができた。この36文について、さらに内容別にグループ化を試みたところ、

図3に示すとおり、7グループに分けることができた。また、KJ法^{注1)}を参考にし、各グループに属する個々の文の類似性(親和性の高いもの)に着目しつつ、それらを統合して「何を言わんとしているのか」という視点から洞察して各グループ名を付けた。なお、これらの作業も筆者の1人が行い、他の2人がその結果について確認した。

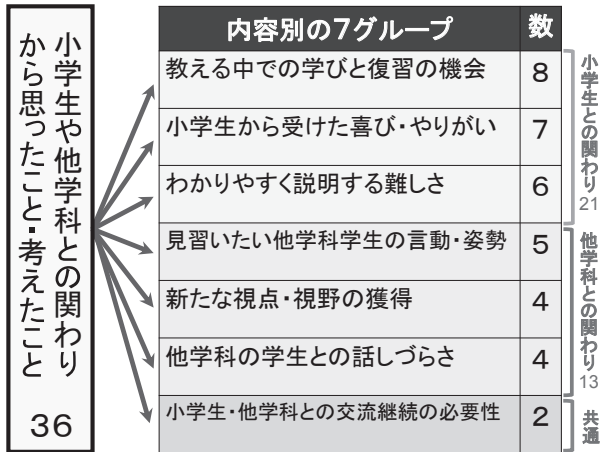


図3 小学生や他学科との関わりから得られた内容別の7グループ

文の数が最も多かったのは「教える中での学びと復習の機会」としたグループ(8文)であった。以下、「小学生から受けた喜び・やりがい」としたグループ(7文)、「わかりやすく説明する難しさ」としたグループ(6文)と続いた。これら上位3グループは、いずれも小学生との関わりを内容とするもので計21文あった。

その一方で、他学科との関わりを示すものは計13文みられ、3グループに分けられた。具体的には、「見習いたい他学科学生の言動・姿勢」としたグループ(5文)、「新たな視点・視野の獲得」としたグループ(4文)、「他学科の学生との話しづらさ」としたグループ(4文)という状況であった。

また、「小学生と短大生が交流を深めるのはとても良いのでこれからも続けてほしい」「こういう機会がないと子どもたちや他学科の人たちと接することがないので、これからも続けてほしいと思う」の2文からは「小学生・他学科との交流継続の必要性」というグループが見出された。

2) 小学生との関わりから見出された3グループとその内容

(1) 教える中での学びと復習の機会

このグループの中には、「教える内容を自分もわかかっていないと教えられないことに気づいた」「視覚障害体験で目が見えない人も『何もできないわけ

ではない』ことを小学生もそうだが、自分も改めて感じた」「小学生に教える中で、忘れかけていた車椅子の操作を再度学べて良かった」「小学生が片麻痺設定の状態でも金平糖をとるのに苦戦している姿を見て、片麻痺のある人の利き手交換訓練は大変だと思った」等があった。

(2) 小学生から受けた喜び・やりがい

このグループの中には、「段差越えてティッピンググレバーを小学生と一緒に踏んで車椅子を持ち上げたら、小学生が『知らなかった。そんなこともできるんだ』と言ってきて、嬉しかった」「車椅子の自走を見せた時、小学生から『お兄さん、すごい!』と言われて嬉しくなった」「車椅子操作の時、小学生から頼られて嬉しかった」「こちら側の話を子どもたちが真剣に聞いてくれたので、とても嬉しい気分になった」等があった。

(3) わかりやすく説明する難しさ

このグループの中には、「視覚障害体験の目的をうまく説明できなかったので『あれで良かったのか』と後で悩んでしまった」「片麻痺のことを子どもたちにもわかりやすいように『片方の手が使えない』と説明してしまっていたが、もう少し具体的に説明したほうが良かったのではないか」「最初の説明の時に小学生がこちらを真剣に見ていたので、緊張してしまってもうまく説明できなかった」等があった。

3) 他学科との関わりから見出された3グループとその内容

(1) 見習いたい他学科学生の言動・姿勢

このグループの中には、「幼児保育学科の人が『仕事で触れ合う子どもたちのことを考え、どう楽しんでもらうか常に気を配った』と言ってたのを聞き、刺激になった」「全体の司会進行役の幼児保育学科の学生は元気が良く、自分たちも実習では人前に出ることもあるので、見習いたいと思った」「幼児保育学科の学生は元気に子どもの名前を呼び、場の雰囲気高めようとしていて、見習いたいと思った」等があった。

(2) 新たな視点・視野の獲得

このグループの中には、「昼食のうどんにポテトチップスをかけるアレンジは、幼児保育学科の学生ならではの発想だと感じた」「幼児保育学科の学生は子どもたちに『〇〇お兄さん、〇〇お姉さんと呼んでね』と伝えており、親しみやすい呼び方は大切だと思った」「幼児保育学科の学生が、子どもたちに飲み物をペットボトルで注ぐ時、子どもがワクワ

クするような絵の中から注いでいるのを見て、雰囲気づくりも大切だと感じた」等があった。

(3) 他学科の学生との話しづらさ

このグループの中には、「せっかく他学科と合同で行うから話しかけようと思ったが、看護学科の学生には何だか緊張して話しづらかった」「看護学科の学生とは少し距離感があって話ができなくて残念だった」「もっと日頃から他学科の学生と関わる機会がないと気楽に話せないと思った」「同じ学校にいても、幼児保育学科や看護学科の学生たちとは普段話したりすることが少ないので、関わりづらかった」があった。

4) 小学生や他学科との関わりから得られた内容における構図

図4に、こうした小学生や他学科との関わりから介護福祉学科の学生が得た内容を図示した。図4からもわかるとおり、大きく「肯定的な内容」と「課題となる内容」に分けることができた。

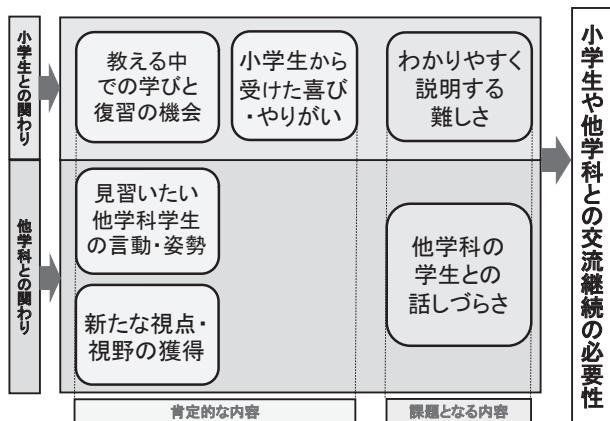


図4 小学生や他学科との関わりから得られた内容における構図

5. 考察

1) 介護の知識・技術を活かして小学生に認められる体験の重要性

小学生との関わりは、生活支援技術やストレス視点等、学んだ知識・技術の発揮や確認になったといえる。さらに、その成果が小学生から認められる体験となり、学生の喜び・やりがいを引き出すことにつながったといえる。つまり、高齢者や障がい者だけでなく、小学生との関係形成においても、企画次第では介護の知識・技術が役立つ、ということがいえると思われる。このことに関連して鈴木(2014)もケアリング、つまりケアを通しての関係形成やつながりについて「信頼関係、優しさ等の態度面だけではなく、ケア専門職としての知識や技術が必須である」と述べている²⁾。

2) 多様な相手に対してわかりやすく説明できる力の必要性

上之園(2014)は「地域包括ケアの展開により、地域での生活を支援していくことは、家族や地域社会でのインフォーマルケアを担う人々をも対象」になると述べている³⁾。しかし、学生にとっては、介護の知識・技術を小学生にもわかる形で説明することは難しかったといえる。今後、認知症の利用者や家族介護者等への支援、多職種協働がさらに求められるなか、多様な相手に対してわかりやすく説明できる力を養っていく必要がある。これに関連して太田(2014)も「家族や地域住民との関係性を支援する役割がより強まる。そこでは専門機関・職種だけでなく、家族や地域住民とともに協働するため、介護福祉実践の『実践力』それを『説明できる力』がより求められる」と指摘している⁴⁾。

3) 他学科の学生から受ける多くの刺激とそれに伴う視野の広がり

他学科の学生からは、利用者との向き合い方や考えもしなかった視点等、多くの刺激を受ける可能性があり、他学科との関わりや交流は重要と思われる。さらに、こうした重要性は、学生時代だけでなく、将来、介護福祉士や保育士、看護師として働くようになってからも継続的に求められるものである。このことに関連して古川(2013)も「保健医療福祉連携の課題として、最近ではお互いに忙しくメールや文書での連絡が多く、直接時間をとって話し合う機会が減っている。Face to Faceで相手の表情を見ながら専門家同士が話し合うことが重要であり、そのことで大きなヒントをもらい、考えなかった視点に気づくことができる」と指摘している⁵⁾。

4) 介護と看護の相互理解を促す卒前教育からの学科を超えた交流機会の必要性

本調査結果からは、介護福祉学科と幼児保育学科ではなく、介護福祉学科と看護学科の学生同士の関わりに課題が残った。このような結果は、松本短期大学における3学科合同の選択科目である「地域ボランティア演習」での課題と重なるものであり、ここでも「もっと他学科の人といろいろな話ができれば良かった」「同じ学科同士はよく話していたが、他学科が加わると話があまりなくなる」等の意見が聞かれていた⁶⁾。

しかし、実際には学生時代だけでなく、就職後も介護福祉士が看護師に自らの意見を伝えるににくい状況も認められている。この点について赤沢(2009)も、看護師に比べ介護職は「自分の仕事に対して誇りがもてなかったり、自信がなかったり、意見が言えず

自分の中の気持ちを押さえこんでしまうことが生じている」と報告している⁷⁾。それだけに、介護と看護の相互理解を促進するためにも、卒前教育の段階から介護福祉士と看護師を目指す学生同士の交流機会を増やすことが必要と思われる。

6. 結論

図5は、前述した図4に考察等で得られた視点も加えて新たに作成したものである(図4の構図修正)。図5を参照しつつ、本稿の結論として以下3点述べる。

第1に、参加者全員ではないものの、小学生や他学科との関わりは、学生自身の学びの発揮・確認と広がりにつながる可能性がある。

第2に、学生の喜び・やりがいを引き出すためにも、介護の知識・技術を活かして小学生から認められる体験が重要である。

第3に、他学科、特に看護学科との交流機会を増やし、卒前教育の段階から対人コミュニケーション能力の向上を図っていくことが必要になる。

以上に共通していえることは、そのような可能性・体験・機会のある場をいかに大学と地域とが協力して創り出していくか、ということになる。地域の人々とのつながりを松本短期大学や学生が学び・感じとり、同時に松本短期大学の教育力や学生の学びを地域の人々へと還元していくことが地域に密着した介護福祉士・保育士・看護師を養成していくことに結びつくはずである。

今後は、学生が得られた内容を参考にして交流事業等の発展に向け、さらなる工夫を行っていきたいと考えている。同時に、他科目での学びを交流事業でさらに活かす等、介護福祉士を目指す学生の成長促進を図っていきたいと考えている。

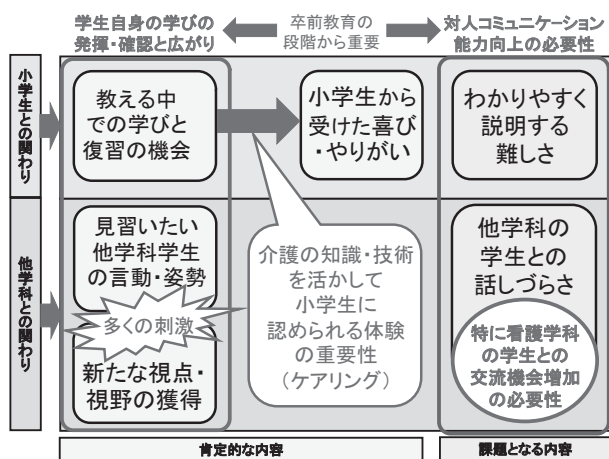


図5 小学生や他学科との関わりから得られた内容における考察等を反映した構図(図4の構図修正)

謝辞

未筆ながら、本調査を行うにあたり、ご協力いただいた学生の皆様をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

注

- 1) K J法とは、文化人類学者の川喜田二郎氏が考案した創造的開発の技法のことで、考案者のイニシャルからK J法と名付けられた。簡便法は親和図法とも呼ばれている。具体的には、蓄積された情報から必要なものを取り出し、関連するものをつなぎあわせて整理し、統合する手法の1つであり、カード(紙片)を活用するところに大きな特徴がある(川喜田二郎:発想法,中公新書,1967/川喜多二郎:続・発想法,中公新書,1970 参照)。

引用文献

- 1) 深沼 光:大学と地域の連携—継続の効果と課題。日本政策金融公庫論集,第7号:22,2010.
- 2) 鈴木聖子:介護におけるケアリング。介護福祉学事典,ミネルヴァ書房,283,2014.
- 3) 上之園佳子:介護福祉の対象。介護福祉学事典,ミネルヴァ書房,9,2014.
- 4) 太田貞司:地域包括ケアにおける介護福祉。介護福祉学事典,ミネルヴァ書房,41,2014.
- 5) 古川宏:わが国の保健医療福祉連携の展望—私のIPWとIPEの経験から。保健医療福祉連携,Vol.5 No.2:82,2013.
- 6) 合津千香,保高一仁,春日仁子ほか:幼児保育・介護福祉・看護3学科合同「地域ボランティア演習」の成果と課題。松本短期大学研究紀要,24:14,2015.
- 7) 赤沢昌子:看護と介護の共催研修の結果と連携における課題—終了時アンケート調査より。松本短期大学研究紀要,18:54,2009.